

イスラームの飲酒文化

中沢高校 押野 尚夫

一 はじめに

「イスラーム教徒はシャリーア（イスラーム法）によって厳しく生活を定められており、食生活では豚肉を食わず酒を飲まない」は常識のように教えられているが、これを強調しすぎることは、厳しいイスラーム世界“の固定観念を生徒に与えることとなり、イスラーム過激派によるテロ事件とも相まって相互理解不可能のイメージを育ててしまうのではないだろうか。イスラーム世界の多様性を再確認する意味でも、イスラームにおける飲酒文化を探ってみたい。

二 現代のイスラーム世界では酒は飲まれているか？

意外に飲まれている。酒はいけないもの、という共通認識はあるが、極端に厳しく外国人にさえ飲酒を認めないのはサウジアラビアとクウェートぐらいである。大概は外国人には寛容であり、また、ムスリム（イスラーム教徒）であつてもビール程度ならば、町中で堂々と飲んでいる地域もある。また、おおっぴらには飲めないが、家で隠れて飲む分には黙認されている地域、本国では飲めないが外国ではここぞとばかりに飲んでしまう人々など、実に多様である。

三 そもそも、なぜ酒を飲んではいけないのか？

☆クルアーンで禁止されている。

イスラーム教の聖典であるクルアーン（コーラン）には飲酒の禁

止を説いた箇所がある。

第五章「これ、汝ら信徒のものよ、酒と賭矢と偶像神と占矢とはともに厭うべきこと、シャイターンの業。心して避けよ。さすれば汝ら運が良くなる。シャイターンの狙いは酒や賭矢などで汝らの間に敵意と憎悪を煽り立て、アッラーを忘れさせ、礼拝を怠るようにしむけるところにある。汝らきっぱりとやめられぬか。アッラーのお言葉に従い、使徒の言うことをきけ。よくよく警戒せよ。」

（井筒一九六四）

これはムハンマドの活動後期になって下った啓示で、活動初期のムハンマドは飲酒を完全に禁止していたわけではない。飲酒の禁止は段階的に行われたらしい。もっとも、ムスリムにとってはクルアーンはムハンマドを通じて下された神の啓示そのものであり、ムハンマドその人の言葉ではない。ムスリムにとっては、飲酒はムハンマドが禁止したわけではなく、神が禁止したのだという点には常に注意を払う必要があるだろう。

次に完全禁止以前に下された啓示を見てみよう。第四章「これ汝ら、信徒の者、酔うているときには、自分で自分の言っていることがはっきりわかるようになるまで祈りに近づいてはならぬ。」（同上）からは、飲酒しても良いが、酔って迷惑をかけてはならない、という考えが読みとれる。“飲んだら乗るな”の精神である。

また、第一章「また棗椰子の実、葡萄などもそのとおり。おまえたちそれで酒を作ったりおいしい食物を作ったりする。ものものわかる人間にとっては、これはたしかに有難い神兆ではないか。」のように、酒を肯定する箇所もあり、また、天国を描写した第七章「飲めばえも言われぬ美酒の河あり」や第五章「この（酒は）い

くら飲んで頭が痛んだり、酔って性根を失くしたりせぬ」からわかるように飲酒は来世での楽しみの一つなのである。

☆ハディースでの禁止

ハディースはムハンマドと教友たちの言行録といったもので、クルアーンとともにシャリーア（イスラム法）の根拠となっている。ムスリムにとっては、これはクルアーンと違い、人間ムハンマドその人の言葉であり、クルアーンで示された啓示を解釈する参考になる。イスラーム教の広がりとともに多くの伝承が生まれ、その中には矛盾するものも少なくない。八世紀以降にその集成が行われるようになった。アル＝ブハーリー（808-870）は伝承されてきた多くのハディースを検証し、スンナ派で最も重要視される伝承集を集成した。その中の「飲みものの書」では、ムハンマドやその後継者たちが酒について語ったとされる内容が記録されている。「…神の使徒は『現世で酒を飲み、それを悔いしないものは、来世ではそれを飲むことを禁じられている』と言った」（牧野一九九四）として飲酒の禁止を確認し、ではどこまでを酒と定義するかとなると「…ウマルは説教台に立ち『さて、酒を禁じる啓示が下された。すなわち、ぶどう、なつめやし、蜂蜜、大麦、小麦の5つから作られた酒で、これは人の心を狂わせる』と言った。」で定義付けをする。もちろん、これ以外の材料で作るアルコール飲料が後から知られることもある。「…シンドで米から作られる酒について尋ねたとき、彼は、それは予言者の時代―ある伝承によればウマルの時代―には知られていなかった、と答えた。」これについては「人を酔わせる飲み物は全て禁じられている。」というムハンマドの言葉で酒と扱われる。コーランやハディースが根拠となり、イスラーム世界では飲酒は

罪悪とされるようになった。一般的に酒を飲んだ自由な信者は八〇の笞打ち、奴隷には四〇の笞打ちを課している。これは本人の自首、もしくは二人の証言によって確定される。（黒田一九八三）

こうして、飲酒が罪悪であるとの見解ではイスラーム世界は一致しているが、それでも様々な地域での対応の違いが生まれてきている原因は、何をもって飲酒とするかの解釈の違いが原因かと思われる。先ほどのブハーリーのハディースでも「酔わない限り飲んでもかまわない」など飲酒に対する様々な解釈を可能にする曖昧な言葉がある。

現存するスンナ派四法学派（ハナフィー派・シャーフイー派・マリーキー派・ハンバリー派）およびシーア派のうちで、ハナフィー派のみが、ムスリムの医師が許す場合、葡萄酒以外の酒を薬用に使用する場合には考慮する解釈を示した。（黒田一九八三）また、ハナフィー派のみがアルコール飲料（葡萄酒を除く）を不浄ではないとしている。ハナフィー派はアブー＝ハニーフア（699-767）の創始した学派で、個人的見解を大幅に許容し、純粋にアラブ的ではない地域において広がった。近代以降は、アラビア半島を除く西アジア、下エジプト、インドなどで支配的である。（黒田一九八三）ただし、現在は、ワッハーブの基礎となったハンバリー派以外では、法学派の違いから禁酒の厳しさが違っていると認められず、むしろ伝統的なイスラーム社会ではある程度寛容に扱われていた飲酒が、近代から現代にかけて厳しく解釈されるようになり、地域によってその程度に差が出ていると考えた方がよいだろう。

四 禁酒は守られてきたか？

守られていない。

☆ジャーヒリーヤ時代（ムハンマド以前、無明時代）

飲酒の風習はあった。詩人イムル・ウル・カイス（五〜六世紀）は父親が討たれたとの知らせが入ったとき酒宴中で、「今日はしらふにはもどらぬが、明日は酔わぬ。今日は酒、あすは仕事だ！」と叫んでさらに痛飲したという。（前嶋一九七七）

☆ムハンマドから正統カリフ時代

飲酒の完全禁止にいたるまで段階的に啓示が下されていることから、節度ある飲酒を求める程度では解決できないほどに、飲酒の弊害が大きかったのではないか。飲酒の上でのケンカなど、トラブルが絶えなかったことが想像される。「飲みものの書」には禁酒の啓示が下った時の状況が記されている。「わたしが…略…アブー・タルハ…略…になつめやしの酒を注いでいたとき、突然、人がやって来て、酒が禁止されたことを伝えた。そこでアブー・タルハが「アナスよ、さあ、それをこぼしてしまいなさい」と言ったので、わたしはその通りにした」。ハディースに登場するということは、ムハンマドに親しかつた人々であろう。その人々でさえ、完全禁止までは酒に親しんでいたのである。

☆ウマイヤ朝

歴代のカリフたちは酒に親しんでいたらしい。特に、ワリード二世は酒の歌で有名であった。（黒田一九八三）また、アッバース朝成立時、アブル・アッバースの叔父アブドラーはウマイヤ家を殲滅するために酒宴を開いてだまし討ちをしたという。（前嶋一九七七）

☆アッバース朝

歴代カリフ・宰相たちの飲酒。サーリービー（960-1038）による一〇代カリフ、アル・ムタワツキルの祝宴の描写は豪華なもので、招待客の目の前に金貨銀貨を満載した籠が置かれ、大杯の葡萄酒をあけるたびにつかみ取りが許されたという。（前嶋一九七五）

☆以降のイスラーム宮廷

全般的に禁酒が守られていたとは考えがたい。オスマン・トルコのスルタンなどはかなり酒に親しんでいたらしい。コンスタンティノーブルを陥落させたメフメット二世は大酒飲みであった。（前嶋一九七五）

☆その他有名人の飲酒

「医学典範」のイブン・シーナー（980-1038）は、中央アジアのボハラに生まれ流浪の生活を送ったが、晩年はイスファハンの領主に大臣として登用された。その頃は夜ごとに酒宴を開いてしばしば夜更けに及んだという。（前嶋一九六五）

☆飲酒詩人

飲酒が禁じられているイスラーム世界であるが、飲酒をテーマとした詩は数多く存在する。

アブー・ヌワース（747or762-810or813）はアッバース朝時代の詩人で、当時の定型を無視した新しいタイプの詩をよみ、飲酒や男色など当時としては背徳的なテーマをあつかった。時にはハールーン・アッラシードや次代のアル・アミンなどカリフに仕えることもあった。彼の「酒屋の親父」という詩の一部を読んでみよう。ここでは飲酒は、悪徳ではあるが黙認されているという、当時の社会状況が見て取れる。

私は酒家の親父を怖がらせたらしい。／寝間着をきて寝ているところを起こしたのだ。…略…／私は異人の家を尋ね廻った末、／ようやくこの隠れ家にたどり着いた。／夜で見分けにくかったが、／禿頭と白い髭で彼と分かった。／酒家の親父よ、かたいことを言わないでくれ。／飲酒はタブーであっても、許されているようなもの。(塙一九八八) この異人とは、ユダヤ教徒やキリスト教徒である。異教徒が造った酒を不謹慎なムスリムが飲む、という構図ならば黙認されたのであろう。また、別の詩では、それでも私は酒を飲む、生のままで。／背中を八十回鞭打たれるのを知りながら。思わず罰の方に目がいってしまうが、ほんとうにこれが厳格に実施されていたとしたらヌワースなどはいくつ命があっても足りなくなってしまう。全てのスピード違反が検挙されるわけではないように、柔軟な対応がされていたのだろう。

オマルⅡハイヤーム(1048-1131)の「ルバイヤート」は、受験対策で用語として紹介するだけで終わりにしてしまいがちであるが、ぜひ、何編かを実際に読んでみたいものである。スーフィズムの興隆後、詩人たちは神との合一を象徴的に示すキーワードとして酒を用いたが、ハイヤームやヌワースの詩は象徴ではなく、本当の飲酒を扱ったものであろう。

天国にはそんなに美しい天女がいるのか？／酒の泉や蜜の池があふれているというのか？／この世の恋と美酒を選んだわれらに、／天国もやっぱりそんなものにすぎないのか？(小川一九四九) イスラーム教徒といえ、来世のためにテロを引き起こすコワイ人たち、というイメージが先行する今日、イスラーム世界が生み出した痛快な唯物論を紹介する意味は大きいだろう。

☆千夜一夜物語

飲酒に関する記述が多数見られる。先ほどのヌワースやアツラシードも登場人物として大酒を飲んでいる。なかでも、「船乗りシンドバードの物語」では、第五の航海で興味深い内容が見られる。怪鳥ロックの攻撃で難破した船から、やっとの思いで島に泳ぎ着いたシンドバードは「海の老人」にとりつかれる。これは、いったん背負ったら最後、死ぬまで離さないという怪物だった。シンドバードは瓢箪に葡萄を詰めて酒を作り、これを飲んで酩酊した怪物を退治するのである。ここではどうすればぶどうから葡萄酒ができるのか、その製法が詳しく述べられている。また、「博学のタワッド」の物語」では、美女タワッドは「信者にとって酒は禁じられている」と断定しているが、その前に、「あまたの効用があるにもかかわらず」とも言及している。

この説話集は、ササン朝時代のペルシアの説話がイスラーム世界に受け継がれ、他地域の説話を受け入れながら発展して行き、十六世紀頃のカイロで現在の形が整った、とされている。そのため、町並みの描写や人々の風俗には当時のカイロの様子が反映されているとも言われるが、地域や時代を超えてこれらの説話がイスラーム世界の人々に受け継がれてきたと言うことが重要であろう。飲酒が悪徳とされるイスラーム世界で、飲みまくり酔いまくる登場人物たちを、人々はどのように受け止めていたのだろうか。

五 なぜ禁酒は厳しくなったか？

今日のイスラーム社会では、西欧社会をまねるのではなくそのアイデンティティーをイスラームに求め、より正しいムスリムとして

シャリーアに基づいた生活をしてゆこうという運動が起こっている。欧米諸国との接触、特に植民地支配を通して、いわば敗者として近代化と西欧化を経験したイスラーム社会にとって、それは単純な伝統への回帰ではない。西欧のルネサンスのように、過去を手がかりとした新たな社会の構築運動として捉えるべきだろう。このような広い意味でのイスラーム社会再構築の流れを「イスラーム復興」と呼んでいる。しばしばイスラーム過激派の意味で使われる「イスラーム原理主義者」たちはばかりでなく、暴力を否定するイスラーム世界の一般民衆の間でも、自主的にヴェールを着用するなどシャリーアを遵守する運動が起こっていることから、これは無視できるものではない。(大塚二〇〇〇) 禁酒の徹底も、この潮流の中から理解すべきではないか。

もちろん、欧米との対決姿勢を示している地域や異教徒が大勢を占める大国からの独立を志向するマイノリティーがシャリーアを厳守するようになる、などと単純化はできない。最もシャリーアを厳守するサウジアラビアは親米国であり、アメリカと敵対するイラクは比較的飲酒には寛容な国である。漢民族との摩擦が強まり、中国から独立の兆しを見せているウイグル人たちは街角でビールを飲み合う人々である。

二〇〇一年のアメリカで発生したテロ事件は、一躍日本社会のイスラーム社会への関心を高めた。しかしながら今日の日本社会では、アフガニスタンやイラクに対する、アメリカの軍事行動への疑念は出されても、イスラーム社会を一枚岩のものとして認識し、かつ理解不可能な不気味な存在としてとらえる見方は相変わらず払拭されていない。

他文化の多様性が見えるということは、自分たちの文化との接点も見えらるということである。世界史を学ぶ生徒が、「イスラーム教徒はシャリーアによって厳しく生活を定められており、食生活では豚肉を食べず酒を飲まない」という一般化の向こうに、多様な歴史に培われた多様なイスラームの生活があることを理解してくれることを願う。

〈参考文献〉

- 井筒俊彦 訳 『コーラン』 改版 岩波書店 一九六四
 大塚和夫 『イスラーム的』 日本放送出版協会 二〇〇〇
 黒田壽郎 編 『イスラーム辞典』 東京堂出版 一九八三
 前嶋信次 『アラビアの医術』 中央公論社一九六五／平凡社一九九六
 前嶋信次 『生活の世界歴史7 イスラムの蔭に』 河出書房 一九七五
 前嶋信次 『世界の歴史10 イスラムの時代』 講談社 一九七七
 牧野信也 訳 『ハディース』 中央公論社 一九九四
 牧野信也 『イスラームの原点』 中央公論社 一九九六
 アブー・ハヌーフス 埴治夫編訳 『アラブ飲酒詩選』 岩波書店一九八八
 オマル・ハイヤーム／小川亮作 訳 『ルバイヤート』 岩波書店 一九七九
 豊島与志雄 他訳 『完訳千一夜物語』 5 岩波書店 一九八二
 前川雅子 『オマーンってどんなところなんだ』 凱風社 一九九九
 上岡弘二 『イランの美味しんぼーキャビア談義その他』 河出書房新社 一九九九
 『暮らしがわかるアジア読本 イラン』 上岡弘二編